

【ねがいはましては】

令和4年2月25日

KYOWA SCHOOL

第373号

「受け取り方で」

新聞記事より興味ある2点、いや、おまけ付きで3点、しかも同日のものです。

ある登山家の方が、年一回、若者相手に一泊二日のプチ・サバイバル登山をするそうです。山に入り、釣りをして、たき火で調理し、眠る。もし出会えたら、カエル、ヘビ、山菜、きのこなども食べるそうです。夕食後、「野望タイム」と題し、たき火を囲みながら、本当のところ自分はどうなりたいたいのか、夢をみんなの前で発表するのだそうです。

その夢の中で多いものに、「地元に戻って、よい人に出会って結婚し、地域を活性化するような仕事をしたい」というものが多いのだそうです。

ここまで読んで、「なるほど、真剣に我が故郷を考えているのだなー、感心だ」と、私は感じたのですが筆者はちがっていました。筆者は続けます。「じつは音楽への想いを捨てきれない」とか「ヒマラヤに登って有名になりたい」とか、ド直球の夢を語る若者も毎年ひとりくらいいる。これはほほえましい。「夢がない。やりたいことが、ほんとうに思いつかない」と頭を抱える者もいる。これは痛々しい。

なるほど、ここに集まる若者たちは言うなれば平成時代に生まれた若者たち、高度経済成長期ではなく、あまり過激に経済活動をしすぎると地球環境に良くないし、またじっとしすぎるとニートではないかと疑われる。結構難しい時代に育ってきた人たちなのかもしれません。つまり程よく目立たずのような人生を理想としているのかもしれない。

ここまで成長してきた日本の中であって、何をやっても自由だよという国であって、なにかに縛られながら生きている若者たちの実態が現れているように感じました。親からの一途な期待にズシンと荷を負わされ、学校と自宅との往復が約12年以上続き、「何がやりたいか」と、自問自答すると出てくる答えが「ゲーム」であったり「スマホ」であったり……。さらに追い打ちをかけるようにコロナ禍で外出もままならず、かわいそうなその姿を見て、とある学校では、修学旅行を「VR」をつかって巡るのだそうです。風も感じず、匂いも無し、食感もなく友だち同士のワクワク感も無し、何もないよりマシか……。

思い切って外へ飛び出そう。そしてたった一人で「ゼロ」の世界を探検し、そこから1・2・3……と、自分だけの受け取り方ですべてを吸収していく……。そんな冒険が今はなくなってしまった感を強くしました。

私自身も染められていたことに衝撃を受けました。故郷へ帰って地元に戻りたい……。結構「なるほど」と感じたのですが、筆者は具体性がないとがっかりしていました。

そうなんだよなー、幕末、吉田松陰が多くの志士たちを世に送り出した、いや、出てみたい気持ちを宿らせた頃とは雲泥だなど思いました。何をやってもいいんだよ。どんな職業に就いてもいいんだよ。周りを見、あの人はこうだ、この人はこうだと、「マネ」をするクセがついてしまっているのかもしれない。

テストで良い点を取ることに目標を置くのが当たり前、学校へ行きたくない日があっても行くのがあたりまえ、たまに出会った雑誌に載っていた景色がどうしても見たくて、学校休んでその日はその景色を見に行っただけ。「そうか、行っただけ。」とお母さん。車窓から次々と流れる景色、一瞬たりとも同じではない風、音、におい……。「よし、将来は、オレは、わたしは……。」みなぎる力が次々に沸き上がり、こころに、体に充電されていく……。

そして次の記事です。

ある少年が中学1年時から裁判を傍聴し続けたそうです。覚醒剤取締法違反事件の裁判を傍聴したのがきっかけで、被告は30歳くらいの男性で、こんな普通の人を罪を犯すのか、どんな人生をたどったんだろうと色々考えさせられたそうです。やがて裁判の中で理解できないことに出会い歯がゆさを覚え、「よし、司法に参画したい、法律家になりたい」と、思うようになったそうです。そして18歳で司法試験に合格。コロナ禍で4月から6月ころまで高校が休校になり、集中して勉強ができ、試験日程が約3ヶ月延期されたことで、遅れ気味だった勉強が間に合ったそうです。

そうなんです。学校が休みであったから取り組むことが出来たのです。

ここに来る子どもたちの勉強を見ていて違和感を覚えることが多々あります。定期試験が近づき、懸命に教科書を音読している子がいます。さっと通りすぎる語彙、その語彙一つ一つに「なぜ？」が付きまとっているはずなのですが、スルー……。語彙を覚えることが目的なのです。例えば、朝鮮戦争という語彙が出てきました。なぜ起こったのか、なぜ長引いたのか、なぜ今でも戦争状態なのか、などなど。疑問は湧き出ることをあきらめません。しかしスルー。

「テストさえなければ、絶対に学びは楽しいはずなのだがなー。」わたしは内心、歯ぎしりばかり……。

もうひとつ記事、あるイラストレーターの方が、東京から鹿児島県の加計呂麻（かけるま）島へ移住して2年半、スーパーなし、コンビニなし、トイレはくみ取り式、台風が来ると停電が1日半、ところが自家発電装置を持っていたご近所さんから夕げの招待を受け、みんなでワイワイお食事したそうです。移住してくる人がいると集落総出で歓迎会。子どもがいなくても小学校の授業参観へ出席、「〇〇姉（ねえ）」「〇〇兄（にい）」と、下の名前で呼び合うそうです。

さあ、「ひと」らしさって、「ひと」らしい生き方って何なんでしょうね。思い切り飛び跳ねましょう。